

授業力向上の「共通語」として 学び合いを少しずつ導入

佐賀県 佐賀市立東与賀中学校

佐賀市立東与賀中学校では、学力向上とコミュニケーション能力の育成を目指し、学び合いを取り入れている。同時に、教師が教科の壁を超えて授業力を高める手段とも位置付け、生徒の状況や教科特性などに応じて、一斉指導や授業中の個別指導も併用している。

生徒の現状と 学び合いで特に付けたい力

- 授業中に発言したり、自分から新たな友人関係を築いたりすることが苦手
 - ➔ 固定化しがちな友人関係を広げて、自分の考えを表現したり、周囲とかかわろうとする力
- 授業に対して受け身。学力の二極化も見られる
 - ➔ 全員が授業に主体的に参加し、各時間の目標に到達できる力

学び合い導入の経緯

- 2008年度から取り入れてきたが、研究が次第に形骸化
- 11年度、「学び合いは授業力向上のための共通言語」と捉え直し、改めて教師全員が取り組み始める

学び合いの概要

- 数学科と社会科は、ほぼ毎時間学び合いを柱とした授業を行う。他教科は単元に合わせて部分的に導入
- 全教師が参加する授業研究会を毎月実施

学び合いの工夫

- 一斉授業の良さも尊重し、各教師が出来るところから少しずつ学び合いを授業に取り入れる
- 学び合いの最中であっても、生徒の理解度に応じて個別指導や全員への説明の時間を設けることもある。板書も適宜行う
- 「『学び合い』通信」を発行したり、積極的に授業を公開したりして、保護者の理解を得る

School Data

○1947（昭和22）年開校。有明海を臨む県南東部に位置し、近接型小中一貫教育を進めている。自転車通学の生徒は皆、校則通りヘルメットを着用するなど、生徒は素直で、校内は大変落ち着いている。



校長◎野口敏雄先生

生徒数◎290人 学級数◎10学級（うち特別支援学級1）

所在地◎〒840-2221 佐賀県佐賀市東与賀町大字下古賀1127-1

TEL◎0952-34-7102

URL◎<http://www3.saga-ed.jp/school/edq10451/>

公開研究会◎未定

生徒全員が学ぶ喜びを感じられる授業をつくりたい

佐賀市立東与賀中学校は、2008年度に学び合いを始めた。

その背景は二つある。一つめは、生徒の学力向上だ。授業中、どの生徒も落ち着いて教師の説明を聞いているが、全体的に意欲に乏しく、受け身な点が課題だった。ノートを写すこと自体に力を入れ過ぎて、肝心の授業の内容を理解していない生徒も見られるなど、学力にも大きな差が見られた。

二つめは、コミュニケーション能力の育成だ。生徒の大半は一つの小学校の卒業生であり、幼少期から互いを知っている。固定された人間関係の中で育ったためか、自分にとって居心地の良い、限られた友だちとしか交流しない傾向が目立った。

10年度まで3年間続けてきたが、学び合いに対する教師の意識に差があり、活動が学校全体に広がらず、次第に形骸化してしまった。そこで11年度、学び合いを改めて校内研究の柱とし、教師全員が取り組む体制を整備。研究部会を設け、月1回の授業研究会には管理職を含む全教師が参加するようにした。野口敏雄校長は学び合いを、生徒だけでなく教師の授業力をも伸ばすものと位置付ける。

「本校が目指すのは、生徒全員が学ぶ喜びを感じられる授業づくりです。学力下位層の

生徒を伸ばすだけでなく、上位層の生徒の学習意欲にも応えなくてはなりません。おのずと、教師には新たな工夫が求められます。学び合いは、こうした課題の解決に最良の手立てだと思えます。私は、学び合いを授業力向上の『共通言語』にしたいと考えています。教科の特性によって導入しづらい場合でも、生徒の見取りや発問の工夫など教科を超えて高め合えることがたくさんあると思います」

「生徒を信じる」という信念から指導法や声掛けに工夫を重ねた

同校の学び合いは数学科と社会科を中心に進められている。数学の授業では、当初、教師は課題を提示するだけで解き方などは一切説明せず、生徒だけで学び合いをさせていた。生徒同士の交流にも介入せず、生徒が相手を自由に見付けて話し合うスタイルにしていた。しかし、仲良し同士で話し合うばかりで、交流は教室全体に広がらなかった。私語に熱中したり、解けない問題を友だちに相談せず教師に質問したりする生徒もいたという。数学科担当で研究主任の吉岡修先生は、その頃の思いを次のように話す。

「教師の想定通りに動かない生徒が気になることもあります。しかし、教師は生徒を信じようと思いました」



佐賀市立東与賀中学校校長
野口敏雄 Noguechi Toshio
「生徒を信じ、先生方を信じて、少しずつ着実に取り組みを進めていきたいと思います」



佐賀市立東与賀中学校教頭
貞包浩洋 Sakakane Hiromi
「生徒の日々の変化を着実に見取り、褒める時も叱る時も常に真剣でありたい」



佐賀市立東与賀中学校
吉岡修 Yoshitaka Osamu
研究主任、3学年担任、数学科担当。「他者を思いやり、互いに力を合わせることに素晴らしさを伝えたい」



佐賀県教育庁 佐城教育事務所
指導主事
紫村直美 Shimura Naomi
「目標に向かって共に努力し、みんなが高まる集団をつくっていききたい」

吉岡先生は、次のような工夫を重ねた。

- ◎ 授業冒頭の5〜10分に、教師が解き方を説明する時間を設ける。説明は、その授業のポイント一つに絞る、極力簡潔にする。
- ◎ 教師の説明の後、5分間は生徒一人ひとりによる自力解決を行う。

◎ 誰と話し合うかは生徒の自由だが、床に座ったり、立ったままで学習しなくてもよいように、前後左右の四つの机をつけ、話し合う場所をつくる。

◎ 中・上位層の生徒でもなかなか解けない問題には、教師が話し合いに加わる。ただ、

「授業」で生徒を、学級を伸ばす

第3回

学び合い—クラス全員が学びに参加する授業—

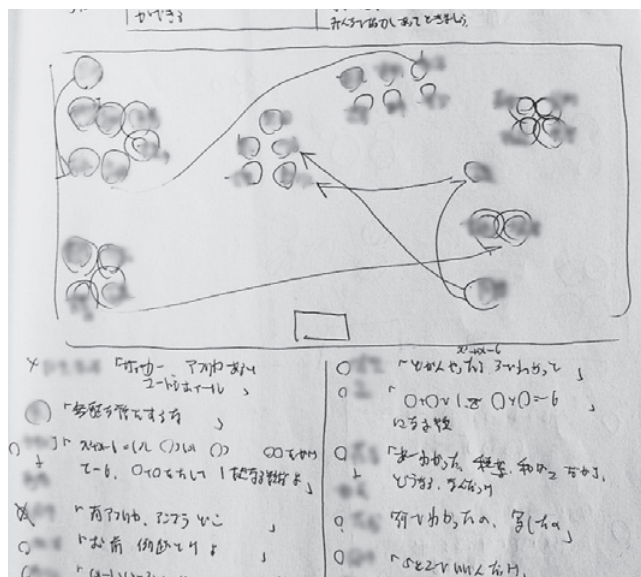


写真 吉岡先生は、授業中の生徒の動きと生徒同士の会話内容を毎時間メモしている。「一斉授業よりも、一人ひとりの様子を意識できるようになったと思います」(吉岡先生)

教師が示すのはあくまでも解き方のヒントであり、生徒自身に解かせる。

◎教師は問題の番号だけを板書し、解けた生徒は、途中式も解答も全て自由に黒板に書く。その解答に対して、他の生徒は誤りを指摘したり、訂正したりする。

◎学級全員が問題を解けることを重視。授業の最後に行う確認テストでは合格点を8割とし、一人でも到達しない生徒がいれば、「全員出来たかな」「なぜ、全員が合格点を取れなかったんだろう」と語り掛ける。

◎個々の生徒が誰と交流していたかを、毎回記録し(写真)、課題の難度を調節する。「課題を比較的難しく設定した授業では、

仲の良い生徒以外にも、多くの友だちと交流することが見えてきました。そこで、単元の終わりなどに1問、上位層の生徒が『背伸び』をしてやつと解ける課題を設け、多様な交流を促しています」(吉岡先生)

3か月ほど経った頃、特に下位層の生徒の様子に変化が表れた。4月にはノートさえ取らなかった生徒が、教科書の問題文を書くようになり、6月には、解けたところまでノートに書き、「どこが分からないか」を自分で説明できるようになった。分からないことを恥ずかしがり、自分から聞きにいかなくなった生徒も、他の生徒に聞きに行くようになった。

同校の指導に当たる佐賀県教育庁指導主事の紫村直美先生は、学級の一人ひとりが主体的に学習に取り組むようになったと話す。

「課題が解けた生徒は、自分から進んで解けない生徒に説明するようになりました。解けない生徒も『なぜ?』『もう一回言つて』と尋ね、懸命に分かろうとしています。吉岡先生の『一人も見捨てずに、誰もが課題を解けるようにする』という考えが、生徒の間に広がった結果だと思っています」

「自分にも出来る」という意識が教師を変える

学び合いに対する教師の関心も、

吉岡先生らの授業を見て少しずつ高まっていった。

「教師が全く介入しない、生徒同士だけの学び合いの実現は、確かに理想です。しかし、一斉授業の経験しかない先生方にとっては、抵抗を感じることもあると思います。授業では、板書や教科書の説明など、一般に学び合いでは良しとされない方法も取り入れます。それを見た先生は『説明してもいいんだ』『黒板を使ってもいいんだ』と感じたのでしょう。授業に取り入れる先生が少しずつ増えていきます」(吉岡先生)

保護者からは、学び合いで本当に学力が付くのかを疑問視する声も聞かれた。そこで、学び合いの紹介に特化した学校通信「『学び合い』通信」を定期的に発行し、更に「学校だより」にも学び合い専用のコーナーを常設するなど、理解を呼び掛けてきた。学び合いによる生徒の変化を目にする機会を増やせば、保護者の理解はもっと得られるだろうと、貞包浩洋教頭は期待を寄せる。

「保護者の心を動かすには、取り組みを説明するだけでは不十分です。実際に学び合いを見て、一斉授業の時と比べて生徒の表情がいかに違うかを実感してもらうことが重要だと考えています。そのため参観日には、学び合いを取り入れた授業をなるべく多く行っています」

こうした改善の積み重ねが、全教師の授業

野口校長が考える学び合い

生徒にどのような力を付けるか、そのための指導はどうあるべきか。これについて、教師は誰もが考えを持っています。校長の考えを一方向的に押し付けるばかりでは、先生方の気持ちは一つになりません。どの先生も主体的に取り組んで初めて、学校全体の取り組みとなり、大きな力が生まれるのです。

先生方一人ひとりが学び合いを共通言語として、教科の枠を超えて他の先生方と積極的に意見を交換し、落ちこぼしも伸びこぼしもつけない授業をしていただきたい。学校運営の責任者として、先生方がそうした授業づくりを試行錯誤できる環境をもっと整えていきたいと思えます。

力向上につながると、野口校長は考えている。「先生方の意識には依然として違いがありますが、どの教科の先生方からも、『こういう形で授業に取り入れたい』という計画が出るようになりました。これは、先生方がそれぞれの授業スタイルを見直し、より良くしようという気持ちの表れです。50分の授業時間のうち、10分でもいいのです。各自のペースで、出来るところから着手していつてもらいたい。そして、12年度の半ば頃までには、全授業で何らかの学び合いを行うことを目指しています」

1年生の社会・数学の授業に見る学び合いの様子

実際の授業の中で、学び合いはどのような工夫と共に実践されているのか。

東与賀中学校の授業を通して、生徒が意見を交わし合い、個人や集団の考えを深めていくプロセスを追った。

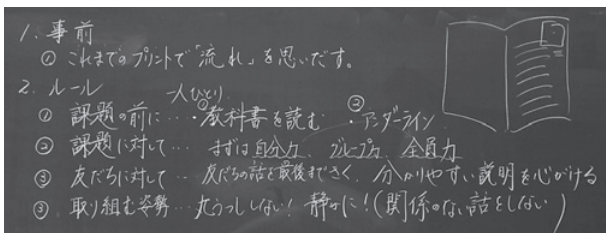
1年生社会 授業者・貞包浩洋教頭

●本時の目標

飛鳥時代の政治と文化を理解する

●授業の流れ

- ①学び合いで大切なことを板書し、学び合いとは何かを振り返る（15分）
- ②飛鳥時代の制度などについて空欄を埋めるワークシートを配布し、前後左右の席に座る4人がグループになって解く（30分）
- ③確認問題を各自で解く（5分）



本時では授業冒頭の15分に、黒板を使って学び合いのルールを確認した。「まず自分で考える」「友だちの答えを写さない」などのポイントが整理されている

●グループ学習の様子 T: 教師

「改新の詔」と「班田収授法」を混同し、「公地公民」の意味をつかめていないグループに、貞包教頭が加わる

A 「『班田収授法』って、一定の比率で人民に田を分け与える制度のことだから……」

B 「えっ違うよ。それは『改新の詔』じゃないの？ あれ、租・庸・調かな？ 先生、どっちだっけ？」

T 「自分の意見を言う前に、友だちの話を最後まで聞くことが大切だったよね？ 詔は、天皇の言葉という意味。その空欄に入るのには制度の名称で、その制度を定めたことされるのが『改新の詔』だよ」

A 「『班田収授法』によって『公地公民』になったんだよね？」

T 「何を見ている？ 資料集か。板書をよく見よう。まず教科書を読んだよね。その方が分かりやすいよ」

▶ 指導の工夫

「1年生では、学び合いの仕方を身に付けることを重視しています。本時は夏休み明け1回目の授業だったため、冒頭で学び合いのポイントを振り返りました。また学習面では、社会科の基礎である資料を読み取る力を育もうと、ワークシートの問題を教科書と資料集の両方を見ないと解けないようにしています。授業中での理解が厳しいと判断した場合は、教師が話し合いに参加したり、一斉指導の時間を設けたりしています」(貞包教頭)

紫村指導主事が見る学び合いのポイント

「教えられた生徒が教えてくれた生徒に『ありがとう』と伝える姿がどのグループにも見られました。誰かに何かをしてもらったからお礼を言う。これは人間関係づくりの基礎であり、要だと思っています。学び合いを通してコミュニケーション能力が育まれていることを実感しました。また、学級でトップを争う生徒同士が互いの進み具合を気にして様子を見に来るなど、良いライバル意識も芽生えていると感じます」

1年生数学 授業者・吉岡修先生

●本時の目標

個数の過不足の問題を、全員が方程式を使って解くことができる

●授業の流れ

- ①本時の課題を示し、本時の基礎となる小学校の学習内容を確認
- ②教科書の問題5間に取り組む
- ③確認テスト。全員が5問中4問、8割の正解を目指す

●中心となる問題

長イスに5人ずつ座ると座れない人が10人、6人ずつ座ると2人だけ座ったイスが1脚できる。長イスの数を求めよ（長イスの数を x とし、 $5x + 10 = 6x - 4$ を立式し、方程式を解く）

●グループ学習の様子1 T: 教師

- A 「座れない人が10人いるって、どういうこと？」
 - B 「座れずに余っているってことじゃない？」
 - C 「(教科書の例題を指して) じゃあ、これと同じだね」
 - A 「ということは、式にすると10を足すの？ 引くの？」
 - B 「足す」
 - A 「じゃあ次に『6人ずつ座ると、2人だけ座ったイスが1脚できる』だけど、2人座れるんやったら、マイナス？ プラス？」
 - B 「マイナス」
 - A 「(本当にそれで良いのか自信がない表情) ……」
- グループの会話を聞いていた吉岡先生がヒントを出す。
- T 「どっかで引っかかっているんやろ。図にしてみたらどう？」
 - A は、5人ずつ座った図と、6人ずつ座った図をノートに書く。
 - A 「5人ずつ座ったら10人座れないから、プラス10」
 - T 「5人ずつ座って10人座れなかった。その10人は、5人掛けの図だとどこにいるの？」
 - A 「外」
 - T 「そう。こういうことだよな？ (図1)」



- A 「じゃあ、6人掛けのイスの場合は、2人しか座れないイスができて、余っている人はいないから…、マイナス2？」
- T 「なぜ2を引くの？ よく考えて」



生徒同士の話し合いに教師が加わり、ヒントを出す様子。それまで数式だけで考えていた生徒たちに、図を書くことをアドバイスしている

3分ほど、図や式を書きながら3人で考える。

- A 「分かった！ 2人を引くってなると、(図2の白丸を指して) この2人を引くことになるやん。だから(図3を指して)、引くのはここに座るはずだった4人なんだよ」



- A 「だから、 $5x + 10 = 6x - 4$ じゃない？」
 - ▶ 指導の工夫
- 「生徒の話し合いだけでは解決できないと判断した場合、教師が話し合いに介入します。考えが行き詰まりかけていたところに、教師が図を描いて考えを整理したり、少しヒントを示したりすることで、生徒の理解は一気に深まります。そうした手立ても生徒同士で行うのが理想ですが、時数の問題もあり、1年生の段階では教師が行う方が良いと考えています」(吉岡先生)

●グループ学習の様子2

問題の解けたAさんは、先ほどと同じ問題でつまづいている他グループに移動し、話し合いに加わった。

- A 「私は-4にした。6人座れるところに2人しか座らないから、4人分余ってるわけやん。その4人を引く」
- EFG 「あ、そういうことね」
- D 「え？ 分かんない。どういうこと？ (隣のEさんのノートをのぞく)」
- E 「私のノートを見てもしょうがないよ。自分で考えよう」
- F 「考え方ならいくらでも教えるけど、答えだけ教えるのは反則やろ？」
- D 「…… (一人で解き始める)」

生徒たちはDさんが解くの見守りつつ、各自の課題に取り組む。その後、Dさんは途中まで解いて改めてEさんに質問していた。

- ▶ 指導の工夫
- 「問題を解き終えた生徒が他のグループに教えにいけば、おのずと教室全体の交流に発展します。また、答えだけを知ろうとする生徒を注意するのは簡単ですが、教師はあえて何も言いません。友だちに注意されてこそ、その生徒は学びに向かうようになります」(吉岡先生)

紫村指導主事が見る学び合いのポイント

「納得できる説明を求めて、動き回る生徒がたくさんいました。分かるまで友だちに質問し、自力で問題を解く面白さを実感しているからだと思います。答えだけを聞こうとした生徒を、『自分で考えてから質問しよう』と友だちがたしなめる場面も見られ、全員で学びに向かう雰囲気が出来つつあると感じました」